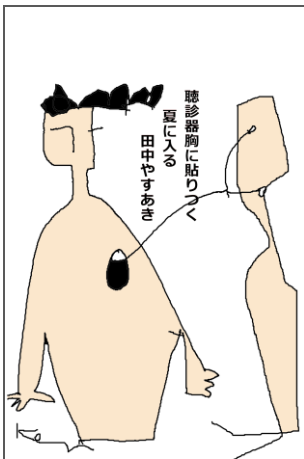




子ども四十大人ばかりのこどもの日

桜井美千

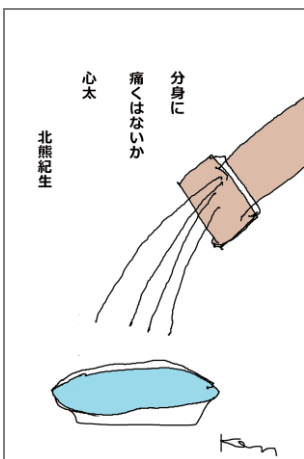
五月五日の「端午の節句」は男児限定だったが、戦後いち早くジェンダレス時代を予見してか「こどもの日」に。少子化で大人の日となる子どもの日。



聴診器の胸に貼りつく夏に入る

田中やすあき

春から夏になった季節の変わり目の微妙な変化を上手にとらえた。五感の中でも皮膚感覚でその実感を表現したところも新しい。季語も効果的。



分身に痛くはないか心太

北熊紀生

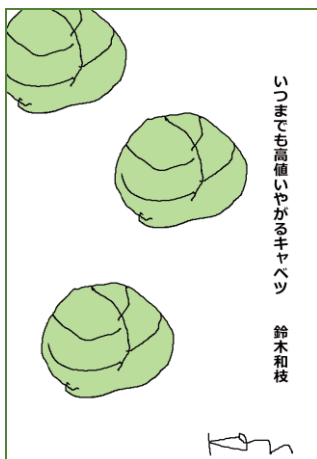
心太を擬人化した句はいろいろあるが、網目を通り抜ける痛みを心配する句は無かった。確かに可哀相だが、かたまりのままでは食べにくいなあ。



花びらを散らし普通の木にもどる

上山美穂

桜は春の季節の大スターである。花がある間は大勢の人から注目され、写真に撮られ、夜間は照明もあてられる。葉桜になりて日常取り戻す。



いつまでも高値いやがるキャベツ

鈴木和枝

価値が上がったと威張れるのに、値上げは嫌らしい。たとえブランド化されても庶民の味方でいたいのだ。「春みどり」歌手ではないよキャベツだよ。



春愁を刈り取ってくれ床屋さん

柳 紅生

不揃いに伸びた髪や髭を床屋さんで整えてもらおうと気持ちもスッキリ。ついでに春愁も一緒に取ってもらおう。滑稽句出来て春愁何処へやら。